

誰にとっても分かる授業を目指して

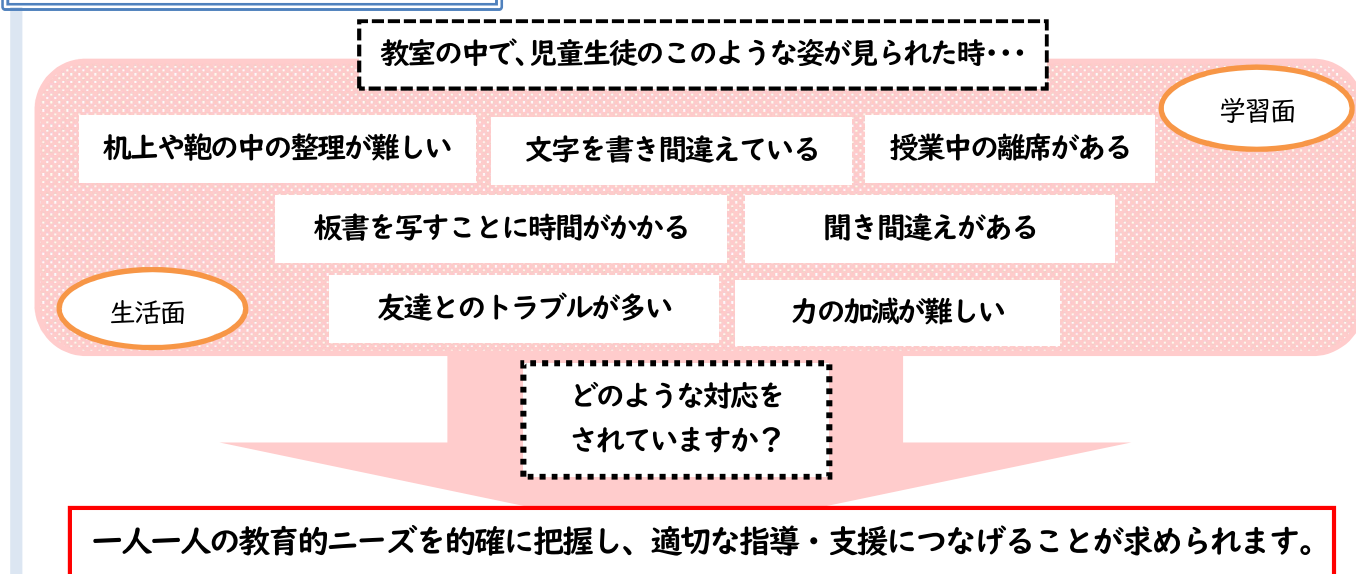
近年、義務教育段階の児童生徒数全体が減少傾向にありますが、特別支援学校、特別支援学級、通級による指導対象の児童生徒数は増えています。

文部科学省『通常学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議 報告』（令和5年3月）には、以下のように示されています。

全ての教師が、障害のある児童生徒を含め多様な児童生徒が通常の学級に在籍していることを前提として、全ての児童生徒に対し、高い学習成果が得られるようわかりやすい授業づくりを進め、通常の学級において安全・安心に学ぶことができるよう、多様性を尊重した学級経営を行うことが求められる。

この報告にもあるように、すべての通常学級に特別な教育支援を必要とする児童生徒が在籍していることを前提に、子どもたちの「困り感」に寄り添い、一人一人の可能性を引き出すため、教師やチームとしての見立てから適切な指導・支援につなげる参考資料としてこのページを活用してください。

子どものサインに気付く



以上の様子が、他の児童生徒に比べて「頻度が多い、程度が重い、継続性がある」と感じた場合は、**行動の記録**を蓄積することが大切です。その際、子どもの行動について、どの教師でも同じ行動の状況がイメージできるよう「いつ」「どこで」「どのような時」「どんな問題が起こるか」あるいは、「上手くいっている時はどんな時か」を観察することから始めます。

文部科学省『発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン』（平成29年3月）

子どもの教育的ニーズを把握するためには、学級担任だけでなく同学年や他学年を担当する教師、養護教諭等と日常的に教師間で子どもたちの様子を話題にできる職場環境が大切です。

- ★児童等の困難な状況の参考指標について **P86～89** 参考【H24 文部科学省調査質問項目】・・・二次元コード A
- ★子どものサインから、教師やチームで見立て、指導・支援へつなぐ【みんなの笑顔Ⅲ】・・・二次元コード B

参考資料集 → 二次元コード A

二次元コード B

二次元コード C

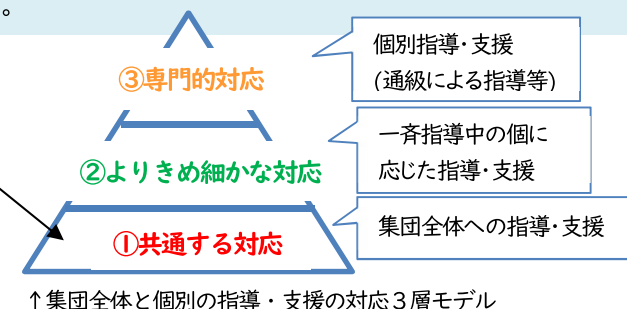
～ 一人一人の学びを最大限に引き出す教師の役割 ～

指導・支援 ①共通する対応

授業づくりに特別支援教育の視点を生かし、支援が必要な子どもたちが学びやすいように授業改善をする、それがすべての子どもたちに分かりやすい授業につながります。

どの児童生徒も主体的に参加し、分かりやすく学べる学習条件【**学習のユニバーサルデザイン**】

- ★子どもたちが安全・安心に過ごせる学級経営について【みんなの笑顔Ⅰ】P1～2、5～6参考・・・二次元コード B
- ★集中できる授業の展開について【みんなの笑顔Ⅱ】P3～6参考・・・二次元コード B



UDL: Universal Design for Learning 学習のユニバーサルデザイン

UDL は、次の3つの原則を基に授業づくりを行います。

- 原則1：課題理解と提示の工夫 学習理解の支援、誰にでも分かる提示の工夫、内容理解の支援
- 原則2：考えの表現と課題解決 意思表現を促進、課題解決の支援、他者の意見理解を支援
- 原則3：学びの自己管理と意欲 学習意欲を高める工夫、自己評価、次へつなげる支援

参考資料：NITS『特別支援教育総論』

指導・支援 ②よりきめ細かな対応

授業全体を分かりやすくしても個別に配慮を要する場合があります。授業中の子どもの様子を見ながら、個に応じた支援を行います。

学習活動を行う際に生じる困難さへの手立てについて、各教科等の学習指導要領には具体的な手立てが記載されています。例：小学校の国語（一部抜粋）『小学校学習指導要領解説国語』（平成29年改訂）

文章を目で追いながら音読することが困難な場合には、自分がどこを読むのかが分かるように、教科書の文を指等で押さえながら読むように促すこと、行間を空けるために拡大コピーをしたものを用意すること、語のまとまりや区切りが分かるように分かち書きされたものを用意すること、読む部分だけが見える自助具（スリット等）を活用するなどの配慮をする。（以後省略）

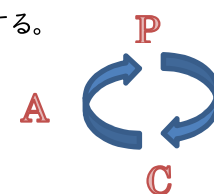
★関連資料【通常学級における多様な教育的ニーズのある子供の教科指導上の配慮に関する研究 国立特別支援教育総合研究】には学習指導要領の記載以外にも手立てについて示されています。**P32**～を参考・・・二次元コード C

指導・支援は、左ページに記載したように、教師やチームの見立て(アセスメント)を基に①共通する対応、②よりきめ細かな対応を考えていくことが大切です。また、必要に応じて③専門的対応も考えていきましょう。

支援のプロセスはPDCA サイクルを回し、段階的に支援する

～具体例～(児童の実態)書くことに時間がかかる。自分の思いを書いたり話したりすることが苦手である。

- P: ICT 機器の使用により、書くことへの苦手意識を軽減しようとする。
- D: タブレット端末で自分の意見を発信させ、活動への参加を促す。
- C: 指導・支援の評価(児童の様子や気付きを把握)
- A: 個別の指導計画や今後の指導・支援への反映
児童の頑張りをフィードバックし次の学習につなげる。



支援の成果が見られない場合は、見立ての見直しをしましょう。

児童生徒一人一人の学びを最大限に引き出すため、まずは子どもからの様々なサインに気付くことが必要です。そして、見立て(アセスメント)より全体や個に応じた指導・支援をチームで考え、PDCA サイクルを回しましょう。子どもたちの「分かる・できる」授業づくりのために、教師自身が指導を振り返ることが大切です。